

郷土資料の作成と活用に関する研究

副読本「かわさき」の編集を通して

郷土資料編集会議

中川 通彦¹

佐藤 俊司²

小松 典子³

栗林 昌人⁴

山本 充起⁵

要 約

副読本「かわさき」は、昭和30年の発刊以来、数次の改訂を経てきた。現行副読本は平成5年度に発行され9年目を迎えている。長い歴史をもつ副読本であるが、学習への活用方法についてはあまり理解されずにきたのが実情である。そこで、副読本の効果的な活用を図るために、平成6年度より12本の検証授業を行ってきた。検証授業を通して課題となるものがいくつか挙がるとともに、「身近な川崎ではどうなっているのだろう」という視点をもつことにより高学年においても大きな効果を発揮することが分かってきた。

本研究会議では、これまでの研究成果と川崎市総合教育センターの総括主題をもとに、来年度より全面実施を迎える新学習指導要領に準拠した副読本の作成にあたっている。具体的には、「問題解決型の副読本」「今日的課題にも対応した副読本」「学び方を学ぶ副読本」への移行、さらに、高学年での活用を目指して編集作業に取り組んでいる。また、副読本をより効果的に活用するために補助教材の開発も進めている。副読本を活用した授業展開例を中心とする「学習指導資料集」の作成と写真等の資料だけではイメージを膨らませることが難しい場面を補う「DVD教材」の開発である。

キーワード：副読本，新学習指導要領，問題解決型，今日的課題，学び方，高学年での活用，補助教材の開発

目 次

主題設定の理由.....	166	(2)教科書と副読本の関係.....	169
1.副読本「かわさき」作成の意義.....	166	(3)研究全体構想図.....	170
(1)子どもを取り巻く状況から.....	166	(4)現行副読本の課題と改善点.....	170
(2)社会科の目標から.....	166	(5)副読本「かわさき」基本構想.....	172
(3)地域学習における		(6)学習指導資料集の作成.....	176
教科書の限界から.....	167	(7)DVD教材の開発.....	178
2.活用にあたって.....	167	研究のまとめ.....	180
研究の内容.....	168	参考文献.....	180
1.研究の方法.....	168	指導助言者.....	180
2.研究の内容.....	168	研究協力者.....	180
(1)今後の副読本「かわさき」のあり方...168			

¹川崎市立向丘小学校教諭（長期研修員）

²川崎市立末長小学校教諭（研修員）

³川崎市立王禅寺小学校教諭（研修員）

⁴川崎市立宮崎台小学校教諭（研修員）

⁵川崎市立宮崎小学校教諭（研修員）

主題設定の理由

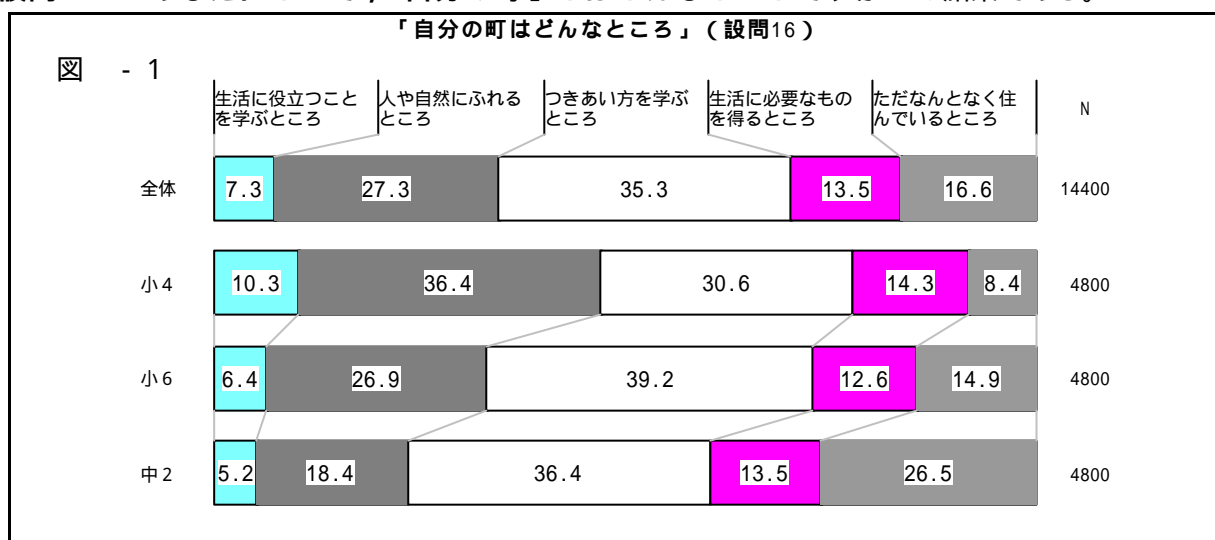
1. 副読本「かわさき」作成の意義

(1) 子どもを取り巻く状況から

地域とのかかわりが薄い、身近な人との出会いが少ないという子どもの実態がクローズアップされている今日、地域とのかかわり、身近な人との出会いの機会が重要視されている。

図 - 1 は、指定都市教育研究所連盟が平成 10 年 10 月に行った調査結果の一部である。12 都市に在籍する小学校 4 年生、6 年生及び中学 2 年生の男女各 200 名、総計 400 名を抽出して行われた（各学年 $n = 200 \times 2 \times 12 = 4800$ ，各都市 $n = 400 \times 3 = 1200$ ，全体 $n = 1200 \times 12 = 14400$ ）

設問 16：あなたにとって、「自分の町」とはどんなところですか の結果である。



小学校 4 年生の 1 位である「人や自然にふれるところ」が学年進行とともに急激に減少し、それに対して「ただなんとなく住んでいるところ」が増えてきていることが分かる。この分析として「子どもたちは学年進行とともに、地域を自分からかわる空間、自分を成長させる空間としてはとらえていないといえるのではないだろうか。」¹⁾としている。

このような状況を改善していくためには、地域の一員として日々の生活を送っている空間である地域を、今一度子どもたちの側に引き寄せていく必要がある。社会科学習においては、社会的事象の意味を観念的な理解に終わらせないためにも、子どもたちに具体的な地域の様子を見せることが大切である。見学や調査などの活動を取り入れ、人の営みを通して地域の社会的事象の特色や相互の関連について考える学習を展開していく必要がある。

このように地域とのかかわりや地域学習の重要性を考える上で、身近な「人・こと・もの」に出会うことができる副読本は、今後更に大きな役割を担ってくると考える。

(2) 社会科の目標から

来年度より全面実施を迎える新学習指導要領に示されている社会科の目標は現行通りであり、「社会生活について理解を図り、我が国の国土と歴史に対する理解と愛情を育て、国際社会に生きる民主的、平和的な国家・社会の形成者として必要な公民的資質の基礎を養う。」とされている。この中の「公民的資質の基礎を養う」という文言は、昭和 43 年版の小学校学習指導要領より終始一貫述べられてきたものである。つまり、社会科の目指すべき究極の目標は「公民的資質の基礎を養う」ことにあるといえる。

¹⁾ 指定都市研究所連盟「子どもがとらえた教育環境」東洋館出版社 2000 年 3 月 P. 38

それでは、この公民的資質を小学校社会科学習の中でどのように養っていけばよいのか。まずは、自分たちの住む地域をより深く理解することが必要になる。そこで、第3学年及び第4学年の目標は以下のように示されている。

第3学年及び第4学年の目標(2)より

(2)...(略)...、地域社会に対する誇りと愛情を育てるようにする。

この(2)の「地域社会に対する誇りと愛情を育てる」という文言は今改訂で新たに加わったものである。第3学年と第4学年の目標が一括して示されたことと合わせ、第3・4学年の社会科学習は今まで以上に「地域学習」の性格を色濃くしたものと見える。

次に第5学年、第6学年の目標を見ていく。

第5学年の目標(2)より

(2)...(略)...、国土に対する愛情を育てるようにする。

第6学年の目標(2)より

(2)...(略)...、平和を願う日本人として世界の国々の人々と共に生きていくことが大切であることを自覚できるようにする。

発達段階に合わせた各学年の目標を見ていくと、地域を基点として、徐々にその範囲を広げていっていることが分かる。第3・4学年では生活の舞台である地域の「人・こと・もの」に学ぶことにより社会的事象の見方・社会生活のあり方を学んでいく。そして、この学びで得た『物差し』をもって第5・6学年の学習に移行する。つまり、地域という物差しを持つことにより初めて日本、そして世界へと目が向けられるのである。その意味においても、地域学習の重要性は非常に大きいものがある。この物差しを持つための教材が副読本である。

(3) 地域学習における教科書の限界から

今改訂において、第4学年と第5学年に分かれていた国土の学習が、第5学年に集約された。これを受け、地域に密着した学習が一層弾力的に展開できるようになった。ところが、教科書の記述は子どもたちの住んでいる地域とは当然のことながら異なった地域を扱っている。社会的事象の一般化、概念化を図るという点では有効であるが、子どもたちの興味・関心、発達段階を考慮すると教科書活用の限界が感じられる。

2. 活用にあたって

今改訂の社会科改善の基本方針については、次のように示されている。

社会科改善の基本方針(イ)より

(イ)...(略)...網羅的で知識偏重の学習にならないようにするとともに、...(略)...、基礎的・基本的な内容に厳選し、学び方や調べ方の学習、作業的、体験的な学習や問題解決的な学習など児童生徒の主体的な学習を一層重視する。

この方針をふまえ、授業への改善が求められている。社会の出来事や事柄、地名や年号などの細かな知識を覚えることに偏った学習から、子ども一人一人が観察・調査、体験などの具体的な活動を通して、社会的事象の意味や働きなどを考えたり自分の意見を述べたりする学習指導への改善である。

これらのことを考え合わせると、副読本の活用にあたっては、従来行われてきた、教師が副読本の内容を子どもたちにどのように教えるかという学習から、子どもたちが副読本を一つの資料として主体的に活用していく能力の育成へと発想の転換を図っていかなければならない。

以上の考え方をもとに、本研究では次のような主題を設定した。

【研究主題】

郷土資料の作成と活用に関する研究

．研究の内容

1．研究の方法

次期副読本の性格を明らかにする。

・副読本作成の意義と川崎市総合教育センターの研究の総括主題を根底に据え、副読本「かわさき」大改訂の構想を立てる。

・教科書と副読本との関係を明確にする。

現行副読本の課題とその改善点を探る。

次期副読本編集にあたっての基本構想を立てる。

基本方針に添って次期副読本の本編及び補助教材を作成する。

2．研究の内容

(1) 今後の副読本「かわさき」のあり方

今回の学習指導要領の改訂は、来年度より実施される学校週5日制の下で、基礎的・基本的な内容の確実な習得を図り、自ら学び考えるなどの「生きる力」を育成することを基本的なねらいとしている。当センターにおいても、「生きる力」の育成を根底におきつつ、川崎らしい教育の創造を目指しており、研究の総括主題を次のように定めている。

「川崎の特色が生きる教育の創造」

そして、上記の研究の総括主題を具体化するために、次の3つのキーワードを設定している。

「自ら学ぶ」「共に学ぶ」「学び続ける」

この3つのキーワードを本研究会議に生かし次期副読本のあり方について以下のように考えた。

問題解決型副読本への移行...キーワード『自ら学ぶ』より

子どもたちが意欲を持って主体的に学習に取り組んでいくためには、社会的事象を自分の問題としてとらえ、様々な解決方法を駆使して、友達の意見と自分の考えをすりあわせながら、自分なりにまとめていく活動を繰り返し経験していくことが大切である。そこで、次期副読本のあり方としては、従前のような内容解説型の副読本から脱却し、調べて考えることができる副読本の編集が望まれる。

問題を発見する力の育成

問題解決的な学習を進めるための第一歩は、問題を発見することにある。そして、その問題の発見は、社会的事象を自分の問題としてとらえることから始まる。そこで、事象との出会い、副読本でいえば資料との出会いが大切になってくる。自分の身近な存在（物理的にも心情的にも）である地域、自分の生活の舞台である地域を出発点とした問題は、子どもたちに切実感をもたらす。

取り上げる社会的事象、それに伴う資料を吟味、選定し、子どもたちにとって「不思議」がたくさん詰まっている事象と資料の提示が必要である。具体的事実を見つめることにより、今まで気にもとめていなかったことが「分からない」「どうしてなんだろう」と思えてくるような事象と資料の提示を第一に考えなければならない。その際、何を見るのか、どう見るかなどの投げかけ、教師の支援が大切であることは言うまでもない。

資料を活用する力の育成

副読本の命は資料であるといっても過言ではないが、資料から事実を読み取る力が備わっていなければ問題を発見、追究、解決していくことはできない。事実を認識することが問題解決の始まりとなる。写真、地図、統計資料、年表、働く人の話等を目的・発達段階に即した形で提示し、学習を進める中で資料の見方、事実を読み取る能力や技能の育成を図る。そのためには、1ページ、1資料ごとにねらいに即した資料を提示することはもちろんのこと、提示の仕方を工夫することが必要である。

考える力の育成

主体的な学習を展開する際には、本来、問題は一人一人個性的なもの（社会科のねらいから逸脱していないことはもちろんのことであるが）である。ましてやその問題が自分の生活とのかかわりの中から生まれてきたのであればなおさらである。地域に学習の場を求めることのメリットがまさにそこにある。目には映っていても見えてこなかった地域の「人・こと・もの」を教材化することにより、自分の生活とのかかわりの中で調べたり、考えたりするようになる。このような学習を繰り返し経験する中から一人一人個性的な社会的なものの見方、考え方が生まれてくる。

今日的課題への対応…キーワード『共に学ぶ』より

「共生」は21世紀を生きていく上でのキーワードになる。これからは、人と人との共生ばかりでなく、人と自然との共生も図っていかなければならない。

- ・人と人との共生 「国際理解」「平和」「人権尊重」「福祉」
- ・人と自然との共生 「環境」

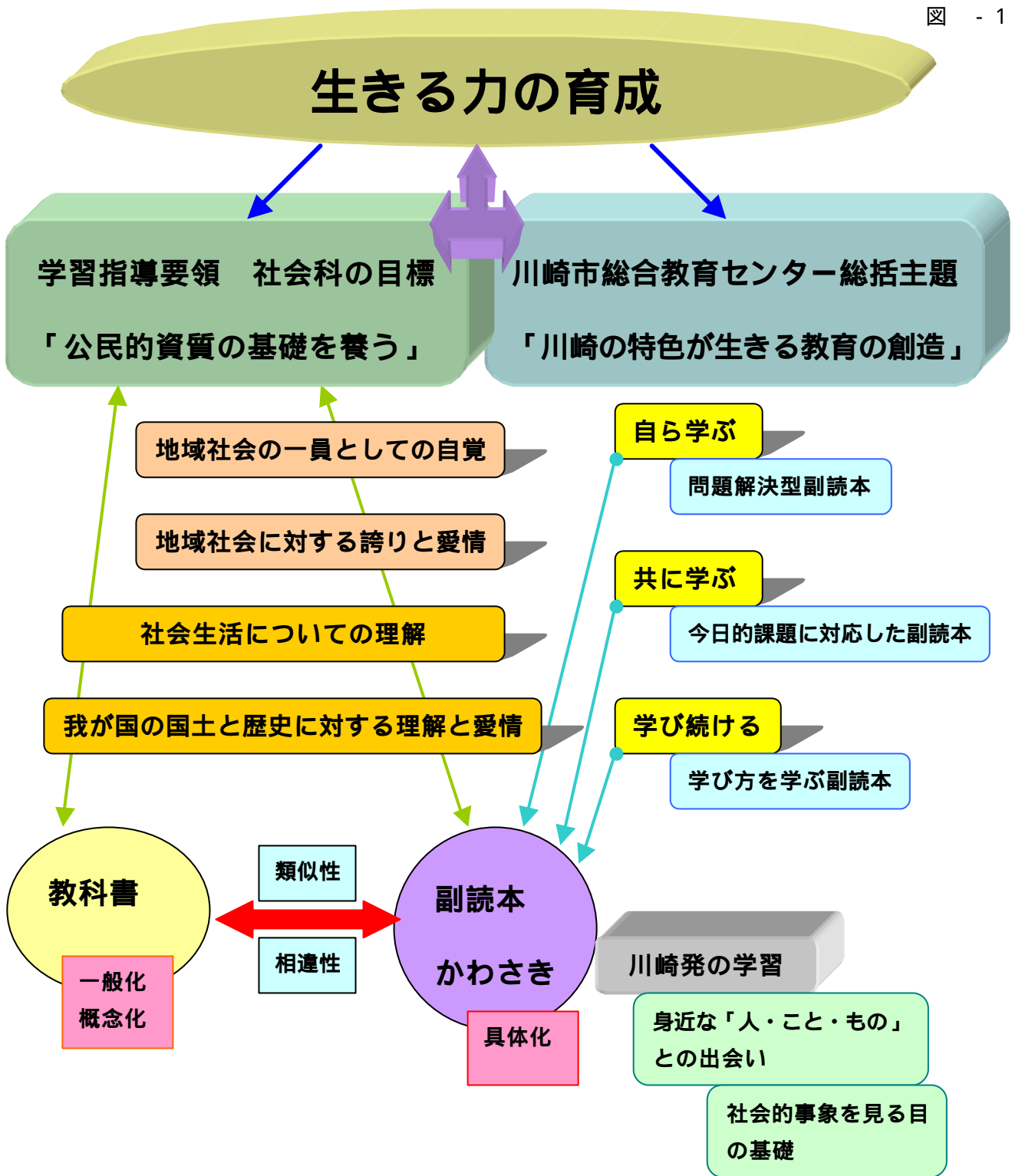
これら今日的課題に対しても、身近な川崎を窓口として学習を進めていくことは意義のあることと考える。自分たちの足下を見つめ、考えるきっかけがつかめる副読本の編集が望まれる。

学び方を学ぶ副読本への移行…キーワード『学び続ける』より

変化の激しい今日、新しい知識や技能を身につけても数年、あるいは数ヶ月を経てしまえば使い物にならない状況も出てくる。学校教育においてもその流れは同じである。しかし、身につけた知恵は一生ものである。例えば、解決したい問題があり、それに対して人に聞いたり、図書館で調べたり、インターネットで検索したりして解決した経験は成就感となって残り、その後の学習への応用・発展として転移できるばかりでなく、生涯にわたって学び続ける意欲を喚起する。つまり、学び方の基礎を身につけるということは生涯学習の基礎を身につけることである。そこで、吹き出しを活用して調査・観察・資料収集等の示唆を与えたり、様々な人たちへのインタビューを囲み記事として提示したりして、子どもたちに多様な学習活動を促すような構成の仕方が必要である。

(2) 教科書と副読本の関係

副読本と教科書とは決して対立する関係にあるものではない。また、教科書を補完するために、学習内容をただ単に地域学習に置き換えただけのものでもない。社会科の学習は、社会的事象を具体的に観察したり、資料を活用したりして学習を進めるが、単なる事実認識に終始するものではなく、その社会的事象の意味を考えることが大切である。地域学習で得たものと教科書に記載されたもの(またはその逆)とを比較し、類似性や相違性を見つけることにより社会的認識が深まったり、広まったりする。出発点は異なるが、両者とも公民的資質の基礎を養うことを最終目標としている。したがって、教科書との関連を重視し、教科書と副読本の両方を学習資料として活用できるように配慮して編集することが大切である。



(4) 現行副読本の課題と改善点

学習指導資料集としてだけでなく、市民読本としての性格も期待されている現行副読本が発刊され9年目を迎えている。この間、副読本の効果的な活用と今後の可能性を探るために、平成6年度より12本の検証授業を行ってきた。また、平成8年度には利用状況アンケート調査を実施した。これらの研究成果から、現行副読本の課題を明らかにし、その改善点を探った。

現行副読本の課題	次期副読本での改善点
<p>学習指導資料として活用しきれしていない現状</p> <p>現行副読本編集の基本方針の一つに「川崎市域の正しい姿をとらえ、市民意識の向上を図る」というものがある。市民読本としての役割ももっているため、直接学習に活用されない資料が掲載されていたり、同ページに市民読本としての資料と社会科の学習で活用される資料とが混在したりして活用しにくい面がある。</p>	<p>対象学年，単元のねらい等各ページの性格を明確にして素材を収集していく。教材化にあたっては，現行副読本で示している次の5点を大切に，精選，検討を加えていく。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・社会的事象を具体的かつ明確に示しているもの。 ・川崎で特有なもの。 ・他の地域と比較が可能なもの。 ・子どもの生活経験と結びつくもの。 ・子どもが見聞きすることが可能なもの。
<p>資料からイメージを膨らませることの難しさ</p> <p>例えば，区や市の特色ある地形や土地利用の様子を調べる場合，航空写真や地形図，土地利用図等を活用して学習していく。しかし，3年生の子どもたちにとって写真と地図を見比べて特徴をとらえていく学習は難しいばかりでなく，退屈な学習にもなりがちである。</p>	<p>動画の活用が考えられる。動く映像は，子どもたちに臨場感をもって事象に対峙させることができる。左記の例から考えると，動画に接することにより，子どもたちの興味・関心が増し，さらに地形条件による土地利用の違いがとらえやすくなる。</p>
<p>高学年での活用</p> <p>学習者の対象を中学年に絞っているため，高学年での活用が見られない。しかし，地域学習の重要性は中学年に限ったことではない。</p>	<p>第5学年の産業学習，第6学年の政治学習や歴史学習の中においても子どもの身近な地域の事例を取り上げ，体験的な活動や具体的な調査活動を導入することにより，生き生きとした授業が展開される。「身近な川崎ではどうなっているのだろう」という視点から単元を組み立てるような学習，川崎（地域）発の学習・単元構想に活用できる事例を取り上げていく。</p>
<p>人の営み</p> <p>町の景観，施設の紹介等豊富な資料が掲載されていて，地域情報の読本としての完成度は高い。しかしその反面，川崎市に根を下ろし，川崎市で働く人の具体的な営みが見えてこない。</p>	<p>働く人々の出会いの中で，人間の様々な生き方に触れ，共感し，子ども自身が生き方を学ぶことができると考える。そこで，「人」に焦点が当てられるところは，可能な限り取り上げていく。川崎市を地域としてとらえ，川崎市に誇りを持ち，川崎市の将来を考えることができるような子どもたちの育成が求められる。</p>
<p>取り扱う地域の範囲</p> <p>各区の項で扱っている絵地図が区役所周辺に限られているので，土地利用と地形条件や社会的な条件とのかかわりがとらえにくい。</p>	<p>行政区に視野を広げていくことによりこれらの関係が浮き上がり，川崎市全体の地域による違いまでとらえることができるようになる。</p>

関連情報

教員主導の授業展開を考えて編集しているため、「もっと調べてみたい」「実際に見てみたい」「どこに行けば調べられるのだろう」などの子どもたちの要求に応えるような関連情報が少ない。

川崎市内には、社会科で活用できる博物館、資料館等数多く存在する。イラストマップで紹介したり、実際に見学に行くための交通アクセスやインターネットで調べるためのアドレスなどを盛り込んだりすることにより、子どもたちの主体的な学習を支援することができる。

文章記述

文章が多く、子どもたちにとって親しみにくい面が見られる。また、写真等視覚から興味を引きだし、文章記述で意味付けを図っているが、子どもたちに読み取らせたり、考えさせたりする要素が薄い。

各種の資料を通して地域の具体的事実をしっかりと見つめることが大切である。そのような活動を通して得られる一人一人の問題点や疑問点が主体的な学習を生み出す。そのためには、発見する目を養うための投げかけ（何を見るのか、どう見るかなどの方向性を示す）の記述が必要である。

(5) 副読本「かわさき」基本構想

プロット

単元のねらいと大まかな学習の流れを想定した上でプロット案を作成した。

下に示したものがプロット案の一部である。全体の構想を大きく「地理」「産業」「歴史」「くらしと文化」「ふるさと川崎」に分け内容を整理した。中項目、小項目に関しては学習のねらいや内容を記述し、資料との関連を図った。また、編集の対象を明らかにして1ページ、1資料ごとの性格をはっきりさせた。

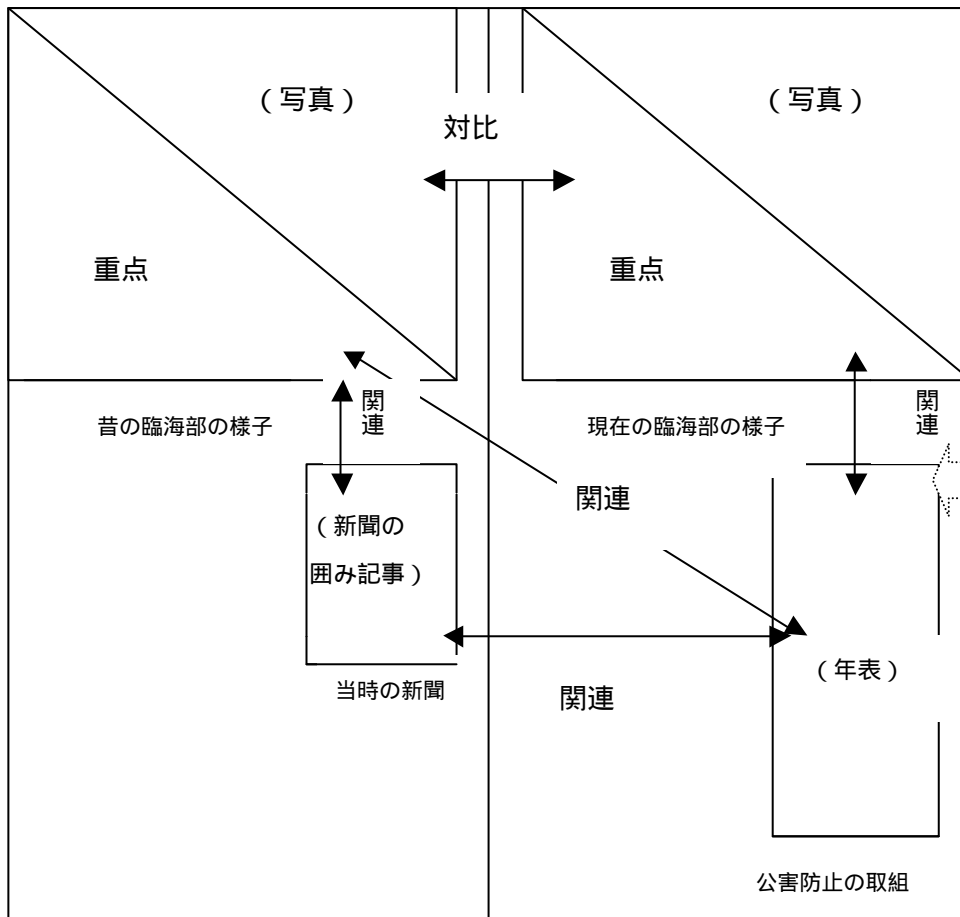
プロットの実際

大項目	中項目	小項目	ページ	資料 ◎写真 ○地図 ●統計資料 ☆お話し ◇その他(イラストマップ等)	対象		入手先 取捨先 出典	備考
					中	小		
見つけてみよう・川崎	1. 空から見てみよう *川崎市の様子は場所によって違いがあることに気付く。	表紙		◎川崎水防隊取り入れ口桜生木			総合教育センター、市消防局航空隊	
		表紙し		川崎市章・シンボルマークとその解説				
		とびら		センター所長挨拶文				
		この本を使うみなさんへ	1					
	2. 空から見てみよう *川崎市の様子を地図によって違いがあることに気付く。	目次	2	3	つばき(市名の由来)、つばき(市名の由来)			
		川崎市の中心地	4	5	◎川崎駅前橋子(航空写真) 総合庁舎を中心に駅前、多摩川沿いまで	○		総合教育センター、市消防局航空隊
		川崎にそって発展してきた地	6	7	◎川崎の歴史(航空写真) 工業地帯、運河、東京湾側道路等	○		総合教育センター、市消防局航空隊
		*京浜工業地帯の中心としての川崎 多摩川にそって発展してきた地 *南武線を中心とした先端産業、都市景観を創り出す	8	9	◎川崎の橋子(航空写真) 多摩川、住宅地、大工場、南武線、沿線道路	○		総合教育センター、市消防局航空隊
	3. 電車や車で走ってみよう *川崎市の交通の様子から、おもしろいところや特徴に気付く。	小高い丘の連なる多摩丘陵 *新興住宅地、緑地保全	10	11	◎多摩丘陵の橋子(航空写真) 丘陵地、田畑、新興住宅、長沢浄水場	○		総合教育センター、市消防局航空隊
		2. どんな形に見えるかな? *川崎市の地形の特徴に気付く。	12	13	◎川崎市の土地の高さと断面図 最高点、最低点、主な河川を越え上り ◎川崎(最高点)、大森(最低点) ◎川崎市内での川崎市の位置	○		現行図説から鉄道資料、河川標尺、河川一帯(標尺より) No. 778 参照 総合教育センター、市消防局航空隊 現行図説
		3. 電車や車で走ってみよう *川崎市の交通の様子から、おもしろいところや特徴に気付く。	14	15	◎市内を通る鉄道 ◎各社の車両	○		現行図説から鉄道資料 各鉄道会社より借用
		4. 何人いるかな? *川崎市は7つの区に分かれており、120万人をこす人が住んでいることに気付く。(中学校)	16	17	◎市内のおもな道路 会津線沿いの人話(川崎縦貫道について) ◎総合交通体系整備計画図(2010プラン)	○	○	現行図説 建設局 川崎縦貫道整備推進 2010プラン
1. 工場がいつか *臨海地区には多くの工場が立ち並び、市の産業の中心地であることに気付く。(中学校) *工業製品は、それに従事している人々の工夫や努力の結晶である。	川崎市の人口 *年齢別グラフから、少子化・高齢化に向かう川崎市の現状を捉える。(総合)	18	19	◎区ごとの人口 ●年齢別人口グラフ(2010プラン)	○		総合企画課 都市政策課統計情報課 同上	
	鉄をつくる工場の人、製鉄所 *国民の生活や産業を支えている鉄鋼業(金属工業)は、それに従事している人々の工夫や努力を支えられながら生産されている。	20	21	◎製鉄(全長航空写真) ◎原料から鉄製品ができるまで(製造過程をイラストで) ◎工場の様子 会津線沿いの人話 ●日本における鉄鋼の輸入の割合 ●川崎における鉄鋼の輸入先	○	◎	総合教育センター、市消防局航空隊 現行図説一部改訂 日本鋼管(株) 京浜製作 同上 日本製鉄協会より作成 「数字で見る川崎」より作成	

紙面構成

資料は副読本の命である。子どもの意識の流れを大切にしながら、学習のねらいに迫ることができる資料提示の仕方を考えなければならない。

子どもの意識の流れを大切に資料提示の実際



社会的な思考力や判断力を育てるためには、下記に示す指導を意図的に設定する必要がある。

- ・事実を認識する。
- ・社会的事象を比較・関連・総合的に見る。
- ・社会的事象相互の因果関係を探る。
- ・社会的事象を自分とのかかわりの中からとらえる。

以上のことを副読本の編集に生かし、紙面構成を考えた。

資料提示の仕方としては、基本的には「重点」「対比」「関連・総合的」の3つが考えられる。

重点

考えを深めたり、広めたりするためには、まず事実をきちんととらえなければならない(事実認識)。そのため、編集にあたっては、とらえてもらいたい事実を大きく提示する。「昔の臨海部の様子」と「現在の臨海部の様子」がこれにあたる。

対比

- ・昔の臨海部...煙がすごい。空気が汚れている。
- ・現在の臨海部...煙が見えない。

この2つの事実から(比較)当然子どもたちは「どうして臨海部(川崎)の空はこんなに汚れていたのだろう」「どうして臨海部(川崎)の空がきれいになったのだろう」という疑問をもつ。そして、「原因は何か」「被害はなかったのか」「くらしの様子はどうだったのだろう」と思考をめぐらせ、学習問題が練りあがってくる。

関連・総合的

次にこの学習問題を追究する活動が始まる。「当時の新聞」や「公害防止の取組」の資料から原因を探ったり、市民・行政・企業三者の取組を調べたりする中で、多くの人々の協力があって現在の川崎の姿があることに気付く(因果関係)。

この意識が次時以降の学習『わたしたちを取り巻く環境』『環境を守る』『わたしたちができること』につながっていく。これらの学習を通して、「自分たちは何をしたらいいのだろう」(自分の生活とのかかわりでとらえる)という意識が芽生え、日常生活を見直すことによって生活環境を守ることができ、それが国土の保全につながる事に気付いていく。

このように子どもの意識の流れを大切に、調べて考える副読本の編集を目指す。

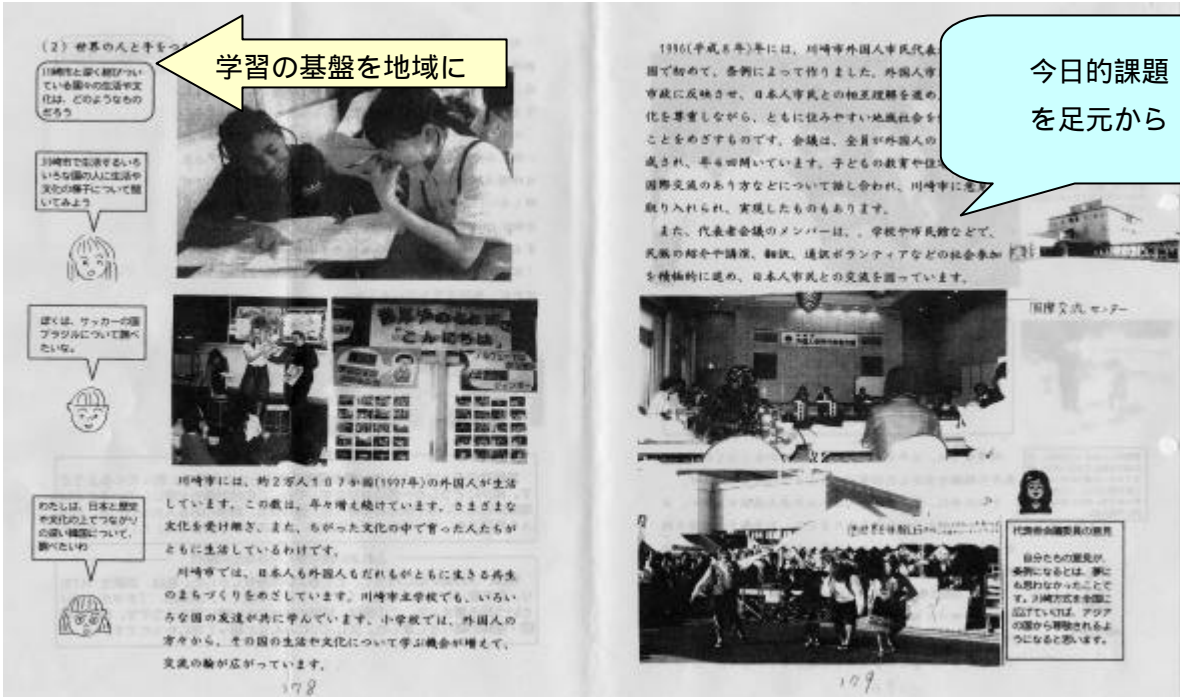
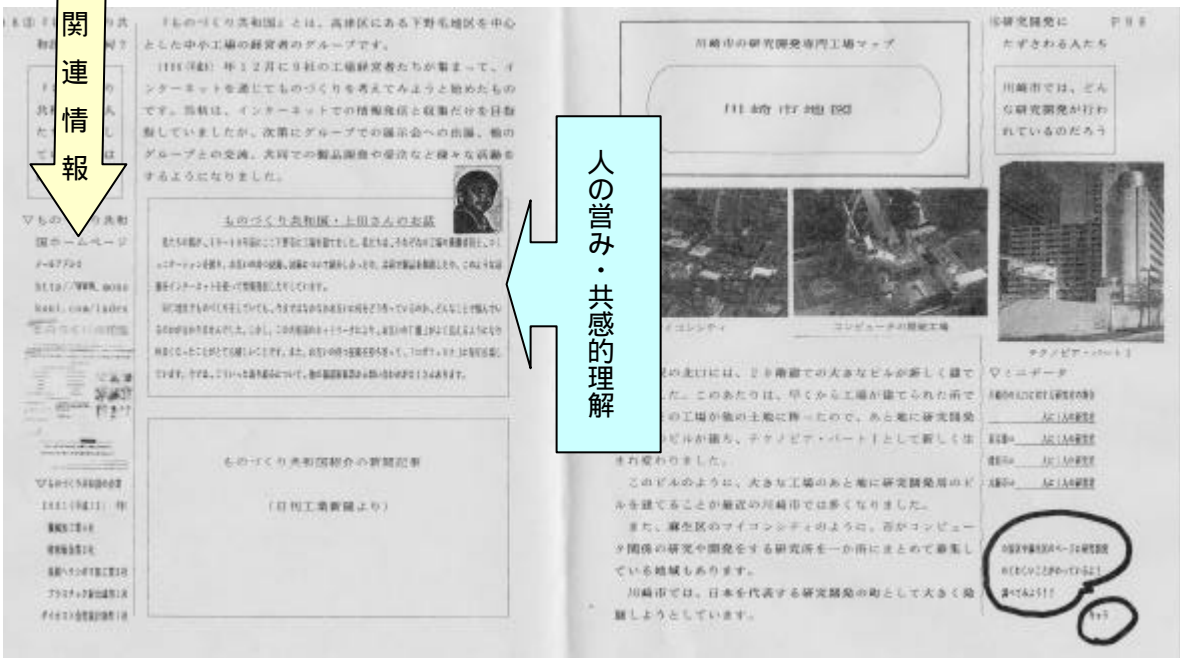
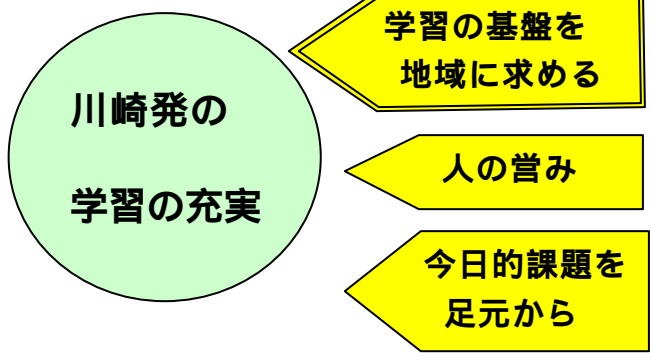
編集例

- 子どもたちの主体的な学習を支援するために、
- ・自ら問題を発見する糸口となる投げかけ。
 - ・問題解決の過程における学習の仕方を吹き出しにより提示。
 - ・「実際に見てみたい」など子どもたちの要求に対応できるような関連情報の紹介。



編集例

- 身近な事例から学習を進めていくために、
- ・高学年における「導入教材」あるいは「比較教材」の重要性。地域の教材化。
 - ・観念的な理解に終わらせないために地域で働く人の姿を通して。
 - ・今日的な課題を自分たちの足元から見つめ直す重要性。



(6) 学習指導資料集の作成

前述したように、平成8年度に副読本利用状況アンケート調査を実施した。その中の調査項目の一つに「活用しやすくするための改善点は?」というものがある。その結果として、「学習への活用方法を具体的に例示する」という回答が多く寄せられた。「副読本の豊富な資料を学習に役立てたいが、ここで、どのように活用していったらよいのか...」という現場の姿が見えてくる。

そこで、次期副読本発行に合わせ、活用方法を記載した学習指導資料集(仮称)の作成が必要であると考へた。

作成のねらい

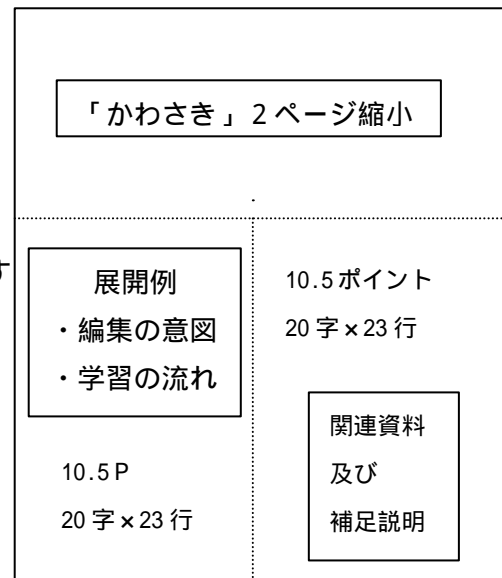
副読本「かわさき」をより効果的に活用するために学習指導資料集を作成する。

編集の基本方針

- ・実際の授業で活用するために展開例を示す。
- ・紙面の関係で掲載できなかった関連資料を紹介する。
- ・補足説明が必要な資料に関して簡単な解説を加える。
- ・巻末に「郷土川崎ミニ事典」のページを設ける。川崎の歴史や統計資料を掲載し、資料性を高める。

編集の具体化

- ・A4判。バインダー差込式(部分改訂に対応)。
- ・上下二段組。上段に副読本「かわさき」の見開き2ページ分を縮小したものを載せる。下段に展開例。
必要に応じて、関連資料及び補足説明の欄を設ける。
- ・本文は横二段組。10.5ポイント、20字、23行を基本とする。
- ・「郷土川崎ミニ事典」は、横二段組。9ポイント、22字、45行を基本とする。



編集の実際 ...歴史新聞を例にして

次期副読本は高学年での活用を視野に入れている。従来の地理的分野を中心とした編集方針に加え、歴史的分野を充実させることで、川崎を空間的な広がりだけでなく、時間的な経緯からもとらえることができるようにしたいと考へた。また、教科書や市販の社会科学習資料集に記載されている標準的な教材だけでなく、子どもたちの身近な地域に見られる歴史的な事象を教材化することにより、生き生きとした学習が展開されることを今までの検証授業からも明らかになった。

しかし、次ページの編集例にもあるように、ただ単に地域の学習にとどまってはならない。川崎にある古墳と大和朝廷との関係を調べることを通して、大和朝廷の力の大きさが分かることを学習のねらいとしている。地域の教材を取り上げた場合にも、最終的には、我が国の歴史と先人の働きについて関心と理解を深め、「我が国の歴史と伝統を大切にすべく育てるようにする」ことをねらいとすることが大切である。このような編集の意図を学習指導資料集の展開例に示し、学習の流れを中心とした構成を考へている。

川崎歴史新聞

第1号
1500年頃

日本の各地で稲作始まる！！



鏡・斧・鋸の自然物をとって煮ていた

くらしに、中国から稲作が伝わってきた。今から、2900年頃から稲作が始まるようになった。日本各地で行われるようになった。川崎市宮前区にある東高輪森林公園では大規模な遺跡が発見され、古代に属して保存されている。稲作が進むと村の力が強くなるようになり、強い者が弱くなるようになった。村全体を守るため深い溝（環壕）によって村を守るようになってきた。また、土器では縄文時代の上層と区別がはっきりと見られるようになった。

川崎の各地で古墳づくり進む！

稲作の開始で生活力が安定してくると、人口が増え力が高まり、むらとむらの戦いからより大きなむらが発見し、豪族となっていく。こうして、人は増え、労働力が高まるとますます生産が増え、大きな豪族が出現するようになる。その力を示すために各地で古墳づくりが進められた。



この分布図からどんな豪族に似たような古墳を作ったと思うか、制作に必要な事は何か考えるのじゃ。



時の権力者がいた!? 白山古墳の真実!

大和朝廷の支配下だった三角縁神獸鏡の秘密

川崎市南区夢見ヶ崎公園・夢見ヶ崎動物公園のそばから、南関東でも最大級の前方後円墳が発見された。全長は7メートルもあり、4世紀後半に築かれた大規模の古墳である。そこに、時の権力者・大和朝廷より贈られた三角縁神獸鏡という鏡が一緒にみつかった。



この鏡は大和朝廷が地方の豪族に対してその支配下であることを証として与えた物である。南関東最大級の支配者は川崎市にいたと考えられる。



三角縁神獸鏡
白山古墳・第六天古墳



昭和42年頃の西堀時古墳写真

白山古墳と同じ三角縁神獸鏡が発見された古墳

この鏡は卑弥呼が韓の皇帝よりもらった銅鏡百枚と同じ銅鏡で造った鏡とみられている。大和朝廷は各地の有力な豪族に贈り、権力を高めることを始めた。



加瀬3号墳



東京市墨田区錦糸が谷下塚
パル 西堀寺下塚
千葉市中央区長子1丁目
夢見ヶ崎動物公園遺構

第6学年での活用

編集のねらい

大和朝廷による国土の統一の様子を白山古墳や三角縁神獸鏡を手がかりとして、身近な川崎からとらえる際に活用。

小単元の目標

- ・大和朝廷による国土の統一の様子がわかるようにする。
- ・国の形成に関する考え方などについて関心を持つようにする。

前時までの流れ

大和朝廷の成立過程を調べる。

- ・邪馬台国の様子。
- ・大和朝廷の誕生。

国土統一の様子を反映している神話を調べる。

掲載事例の活用的一端

大山古墳を調べ、大和朝廷の力の大きさを知る。

大和朝廷と川崎の関係について調べる。

- ・川崎にもたくさんの古墳があった。

資料：「古墳分布図」「梶ヶ谷神明社上遺跡」「西福寺古墳」「加瀬3号墳」

- ・白山古墳は南関東一の大古墳だ。

資料：白山古墳実測図、文章資料

・白山古墳と同じ三角縁神獸鏡は九州でも発見されている。大和朝廷の力は強大だ。

資料：「白山古墳と同じ三角縁神獸鏡が発見された古墳」

- ・市民ミュージアムで詳しく調べたいな。

資料：「歴史新聞第1号」

市民ミュージアム見学の計画を立てる。

その他の活用

身近な遺跡や文化遺産について調べ、それらを生み出した歴史的な背景に関心を持つ。

学習のまとめとして作成する歴史新聞の参考例として。

中学年の歴史学習を想起する。

副読本「かわさき」を開き、川崎に残る遺跡や文化遺産について調べる。

身近な遺跡や文化財の見学の計画を立てる。

見学したことを歴史新聞にまとめよう。

(資料：歴史新聞1～14号)

? 参考資料

「川崎の考古」川崎市市民ミュージアム 1988.11

(7) DVD教材開発

開発のねらい

副読本「かわさき」をより効果的に活用するためにDVD教材を開発する。

- ・写真からイメージを膨らませることが難しい場面を動く映像によって補う。
- ・人間の営みや働きを動く映像と肉声により具体的にとらえさせる。

DVD教材のメリット、デメリット

DVD教材は、あくまでも副読本「かわさき」を補完するものである。取り扱いを誤り、本末転倒に陥らないようにするためにもメリット、デメリットを明確にしておく必要がある。

メリット	デメリット
<ul style="list-style-type: none">・映像がクリア。劣化しない。・見たい画面に瞬時にいける。・子どもたちの興味・関心が高い。・活動の実態や変化していく状況の把握がしやすい。・実際には見学・観察が難しい事実を見ることができる。・選択肢があるため、一人一人の欲求に応じることができる。・ナレーションが選択できる。	<ul style="list-style-type: none">・選択肢が多いので、選べない子どもはとまどう。 教師の支援が必要。・画面に流れているときだけであとは消えてしまう。 写真や絵図との組み合わせが必要。 (副読本との併用)

DVD教材開発予定

副読本との組み合わせを考え、以下のDVD教材開発に取り組む。

子どもたちが実際には見学ができないもの 上空からの景観

「川崎区」「幸区」「中原区」「高津区」「宮前区」「多摩区」「麻生区」「多摩川に沿って」

見学が難しいもの

「北部市場の様子」「川崎の民俗芸能」

子どもたちにぜひ見せたいもの...働く人の姿

「メロンを作る井上さん」「ものづくり共和国の様子」

残しておきたいもの

「戦争体験者の声(空襲,疎開,生活の様子)」

DVD教材構想

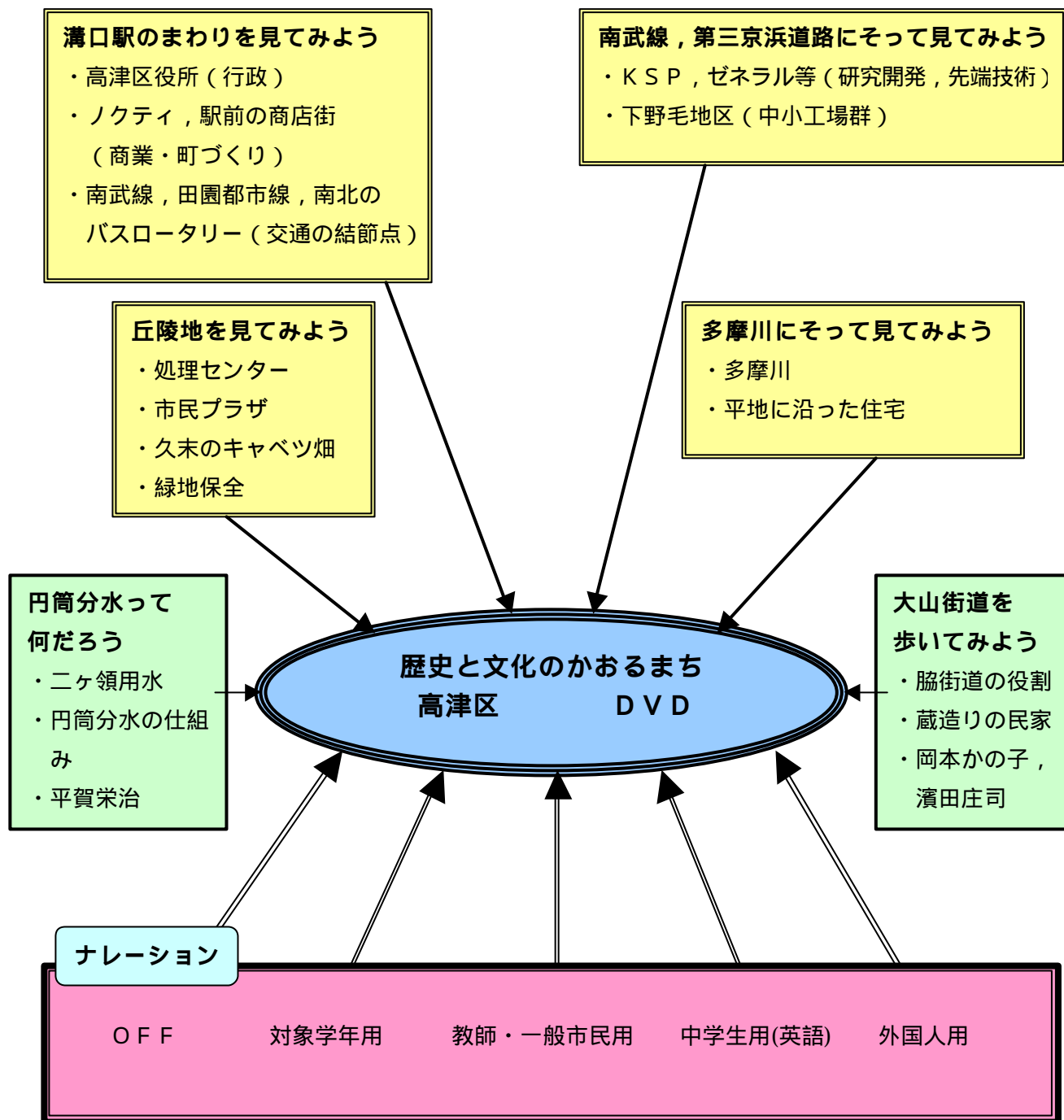
高津区を例にして

DVD教材は、あくまでも副読本の補助教材である。したがって、高津区の構成要素を網羅的に取り上げるべきではない。副読本の各ページのねらいから逸脱せず、子供たちの学習効果を第一に考え構成を図っていく必要がある。副読本のプロットから考えると、土地利用の様子、集落の分布、交通の様子、町づくり、歴史や文化などにスポットが当てられる。その中から、DVDならではの映像に絞っていく。例えば、土地の高低などの地形条件や駅前、大きな道路に面したところなどの社会的な条件による土地利用の違いは空からの映像によって一目瞭然である。土地利用図から区の概観をとらえた後にDVDでの映像を提示することにより、子どもたちの事実認識が確かなものになっていく。

以上のような考えから，土地利用の様子の違いを中心に高津区を4つのブロックに分けて構成を考えた。(二重囲み)

「歴史と文化のかおるまち 高津区」

図 - 2



DVDでは一つの映像に8つの音声トラックを利用することができる。そこで，英語のナレーションを入れることにより中学校の選択英語に活用することができる。また，国際化の進展につれて外国人の在住・在勤が増えている実態を踏まえ，川崎市に対する理解の一助になればと思い外国人用ナレーションを入れることを考えている。

研究のまとめ

現行副読本は、平成5年度に発行され9年目を迎えている。幸にして本研究会議は、現行副読本が発行されてから現在まで途切れることなく続いている。その間に行われてきた検証授業の考察と今改訂の社会科改善の基本方針を受けて、従来の内容解説型の副読本から脱却し、調べて考える副読本への転換を目指して現在改訂作業を進めている。本研究を仮説検証型ととらえた場合、現時点では仮説を立てているところである。次期副読本の作成自体が仮説であり、最終的な検証は市内の教員、子どもたちが実際に副読本を手にしたときから始まる。その意味では、研究の成果というものを現時点で挙げることはできない。強いて挙げれば、「川崎発の学習」を常に意識するようになり、改めて地域を学習の基盤に置くことの大切さが分かってきたことである。地域は日本に繋がり、世界に繋がっていく。また、日本や世界の縮図は地域にある。これは、地域学習によって得た物差しを持って世界を見ていくことを意味する。

今後の課題は山積しているが、現在作成中の副読本を実際に授業の場面で活用し、資料提示の方法と掲載資料の有効性に対する検討を加え、よりよい副読本の作成にあたっていくことが第一であると考えている。

最後に、研究を支えてくださいました、研究担当者所属校の校長先生を始め、教職員の皆様、適切な助言をしてくださいました指導助言者の先生方に、心より感謝とお礼を申し上げます。

【参考文献】

- ・佐島群巳 次山信男 魚地伸子 編『地域を扱う学習の方法と授業』教育出版 1989年
- ・北俊夫著『新学力観に立つ社会科』明治図書 1995年
- ・北俊夫著『社会科の授業はどう変わらなければならないか』明治図書 1997年
- ・桑野ヨシ江他「郷土資料の作成と活用に関する研究 研究紀要第9号」 1996年
- ・伊藤芳男他「郷土資料の作成と活用に関する研究 研究紀要第11号」 1998年
- ・佐藤俊司他「郷土資料の作成と活用に関する研究 研究紀要第13号」 2000年
- ・北野久子他「マルチメディア教材の開発研究 研究紀要第14号」 2001年

【指導助言者】

元川崎市立菅小学校長 工藤 治夫
(元川崎市立小学校社会科教育研究会長)
川崎市立久末小学校長 草開 豊
(平成12年度 川崎市立小学校社会科教育研究会長)
川崎市立東小倉小学校長 近藤 真市
(平成13年度 川崎市立小学校社会科教育研究会長)
川崎市立南河原小学校長 横山 吉雄
(平成13年度 川崎市立小学校社会科教育研究会副会長)
川崎市立南菅小学校教頭 菊池 眞
川崎市教育委員会総務部指導主事 山田 雅太
川崎市教育委員会学校教育部指導主事 小島 康宏
川崎市総合教育センター研修指導主事 前島 和樹

【研究協力者】

川崎市立河原町小学校教諭 滝口 太志
川崎市立下平間小学校教諭 潮 龍馬
川崎市立大谷戸小学校教諭 人見 深雪
川崎市立子母口小学校教諭 佐川 昌広
川崎市立橘小学校教諭 今 広道
川崎市立登戸小学校教諭 中山 敬史